

商品の分散

- リスクがない金融商品はない
- 同じ傾向のリスクだけを選ばない
- 自分が理解できないものは選ばない

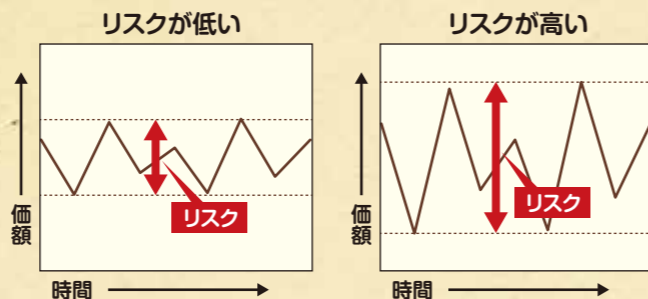
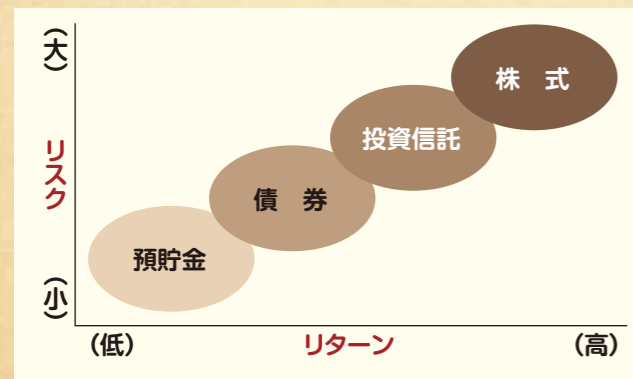
● 「リスク」はつきもの

右頁のグラフのように、長い期間で見ると、物価は緩やかに上昇し、金利は下がり続けてきました。元本保証など安全性の高い金融商品は、利息や分配(配当)も少なく、金利を上回る物価上昇が続くと、逆に元本価値が目減りしていくことになります。

一方で、元本が値上がりする可能性がある金融商品は、逆に値下がりする可能性もあります。「リスク」と「リターン」とは、どれくらいそのブレ幅があるかということを示します。要するに、リスクが完全にゼロというものはないということです。

● 金融商品の傾向をつかむ

シニア世代は、マネー運用に関心の高い人も多いようですが、運用には知識も大切です。金融商品によって、リスクとリターンの傾向は異なります。万が一、市場の激変で商品価値が大幅に下がり、その状態が長期化すると、高齢期には取り戻すための時間的余裕がありません。したがって、ハイリスク商品だけに偏らないように注意することが、とても重要になります。



「リスク」は危険という意味ではなく、ブレの幅のこと。高いリターン(収益)を狙おうとすると、リスクも高くなります。「低いリスクで高いリターン」はありません



● 理解できないものには投資はしない

以前に比べて複雑な金融商品が増えてきています。大きな分類では、預貯金、株式、債券、投資信託、年金・保険などがあり、それぞれさらに細かく分類されます。また、複数の金融商品が混ざっているもの、海外、不動産や先物商品などに投資するものなど、複雑なものもたくさんあります。特に「必ず儲かる」「たくさん儲かる」という商品はありえません。リターン(利益)の高いものは、どのようなリスクがあるのか、自分でわかる範囲のものにしておきましょう。



おススメされると、つい「いいなー!」と思ってしまうにや

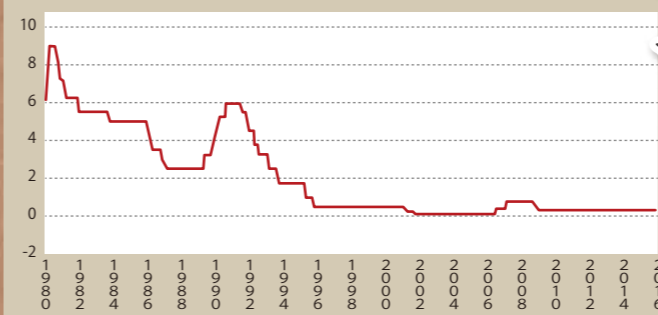
押さえておこう! 運用の基本は「分散投資」

日銀のマイナス金利導入で、預貯金の金利はさらに低くなりました。低金利はメリットもデメリットもありますが、シニア世代にとっては少し残念ですね。国は「貯蓄から投資へ」と誘導していますが、リスクの確認は欠かせません。今回はマネー運用の基礎の基礎「分散投資」を学びましょう。

※本原稿(2016年6月末時点)は、一般的な傾向を解説しており、投資判断を断定したり促すものではありません。

金利8%の時代、退職金1千万円預けると1年の利息は手取り64万円!

基準割引率および基準貸付利率(%)

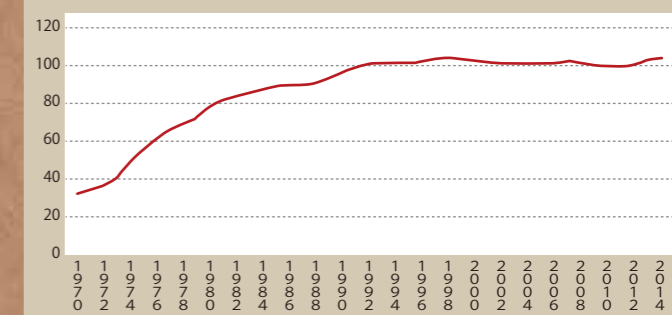


※「基準割引率および基準貸付利率」は以前「公定歩合」と呼ばれ、金融自由化までは預金金利と連動していたもの

昔は、預貯金があれば『悠々自適の老後』だったのです



消費者物価指数

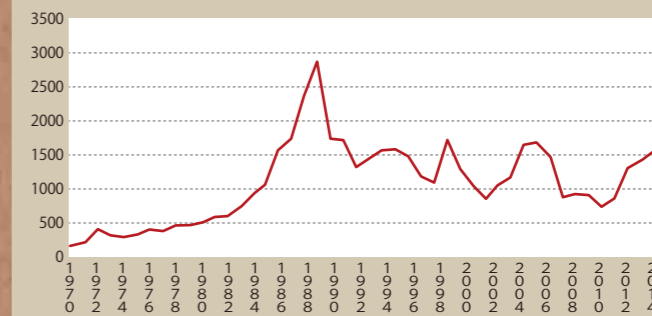


※2010年を100とする指数に換算した年平均推移

物価は長い目で見ると上昇、株価は上下が激しいながら超長期で見れば上昇傾向。お金とどうつきあうか、真剣に考える時代です



TOPIX



※1968年1月4日の東証一部上場全銘柄の時価総額を100とした指数(年末指数推移)